

第 2 部 データ分析編

第1章 質問紙調査による自由回答の分析

この章においては、2つの質問紙調査によって集められた自由回答を中心に分析した結果を報告する。ここでは、それぞれの調査の調査方法について簡単に記しておく。

第1節と第2節は、1997年（平成9年）に長野県諏訪郡原村で行われた調査に基づく。

調査対象者は、69歳以下の有権者で、原村全有権者5402人の中から、系統抽出法によって、318人を対象者として抽出した。ただし、村内には農業大学校があり、そこに住んでいる有権者は、除外した。また、原山地域、ペンション地域の2つの地域からは、原村全体のサンプルに当たらなかった世帯から1人ずつをランダムに選んだ。その数は、139サンプルである。

対象者数は、合計457となった。

調査は、平成9年8月29日から9月1日までの4日間行われた。調査地域がかなり広く、また、宿泊地と調査地点が離れていることもあって、調査方法においては、戸別訪問面接法と留置法を半数ずつ用いた。

また、調査期間が短いこともあって、回収においては、郵送によったものもある。このようにして、最終的に回収されたのは、原村系統抽出分においては、204票、回収率は、64.2%、原山ペンション区では、81票、58.3%であった。全体では、285票、回収率は、62.4%であった。

第3節の宗教法人真如苑の霊能者調査は、1991年12月から1992年3月までの間に真如苑の霊能者を対象に行なわれた質問紙調査である。調査対象者は、当時活動中の真如苑の全霊能者813人で、調査票の配布、回収は、真如苑事務局に依頼した。回答者は、618人、回収率にして76.0%であった。

第1節 自由回答の回答率と回答の長さ(太郎丸 博)

調査法および回答者の社会的属性が及ぼす影響

1. 問題

ランダムサンプリングした対象者に調査を行う場合、普通、いくつかの選択肢を用意しておいて、その中から自分の回答を選んでもらうことが多い。本稿ではこのような質問法を選択肢法と呼ぶことにする。一方では、あらかじめ選択肢を用意せずに、質問に対して自由に回答してもらったほうが良い場合がある。これを自由回答法と呼ぶことにしよう。自由回答法を用いるのは以下のような3つの場合であろう。第一に、職業のように選択肢を用意すると数百個になってしまうため選択肢を質問票に書ききれない場合、自由回答法が必要になる。第二に、研究がそれほど進んでいない場合は、どのような回答が返ってくるか予想がつかないため、選択肢をあらかじめ用意することが困難である。また、不適切な選択肢を作ったために、回答者を予期せぬ方向に誘導してしまう可能性もある。このように、研究が十分に進んでいない場合、自由回答法が必要になる。第三に、回答者の言葉遣い/レトリックを調べたい場合、あらかじめ選択肢を用意するのは、本質的に不適切なことがある。選択肢を用意してしまうと、元来調べたいことを調べることができなくなるような場合、自由に回答してもらうことが必要になる。

これらのような場合は、選択肢をあらかじめ用意せず、自由に回答してもらうことになる。しかし、一般に、自由回答法は、選択肢法に比べると、回答率が低い。単に低いだけならよいが、特定の属性や意識を持つ回答者において特に回答率が低いとすれば、サンプルの“ゆがみ”がますます大きくなることになってしまう。このような“ゆがみ”が著しく大きくなるならば、標本調査において自由回答法を用いることは、断念しなければならぬ。逆に選択肢法と比べて、それほど“ゆがみ”が大きくなければ、アフターコードして選択肢法で得られたデータと同じように分析することができる。また、仮に“ゆがみ”が大きくなったとしても、あらかじめどのようにゆがむのかがわかっているならば、真のデータの分布を推測することも可能になる。

したがって、自由回答の回答率は、どれくらいなのか、そしてどのような人々が自由回答に回答してくれるのかを明らかにすることが重要な課題になる。

2. 自由回答の回答率

用いる質問項目

本稿で分析する自由回答の項目は、以下の5つである。

問3(よいところ) 原村のよいところはどこでしょうか。自由にお答えください。

問8ウ)(本人職) あなたは勤め先でどのような仕事をしていますか。

問 14 (よくないところ) 原村のよくないところ、不便なところはどこでしょうか。自由にお答えください。

問 18 ア) (豊かな生活) あなたにとって豊かな生活とはどのような生活ですか。自由にお答えください。

問 18 イ) (くらしむき) この 10 年ぐらいの間で、あなたの暮し向きに大きな影響を与えたことは何でしょうか。自由にお答えください。

ほかにも職業を聞く質問や友人数、居住地を尋ねる質問項目があるが(これらは、語の厳密な意味から言えば、自由回答法で尋ねられている) これらは今回は分析しない。上の 5 つの自由回答法による質問は、問 8 を除いてすべて研究が十分に進んでいないために用いた質問項目である。もちろんレトリックの研究のためにこれらの項目を使うことはできるかもしれないが、調査票作成の段階でそのような意図があったわけではない。

さらに、比較のために、選択技法を用いて質問された項目についても分析する。用いたのは以下の 5 つの質問である。

問 17 ア) (住み続ける?) あなたは今後も現在お住まいの土地にすみつづけたいと思いますか。

問 19 (階層帰属意識) 仮に現在の日本社会全体を、このリストに書いてあるように五つの層に分けるとすれば、あなた自身は、このどれには入ると思いますか。

問 21 a (性分業) 男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである

問 23 あなたの生活水準はこの 10 年間でどう変わりましたか。

問 24 ア) 過去 1 年間のあなた個人の収入は、税込みで次の中のどれに近いですか。臨時収入、副収入も含めてお答えください。

質問文や選択枝の詳細は、第 3 部の調査票を参照されたい[1]。これらの質問の回答率の検討はあくまで参考のためのものである。次に見るように、ここで選んだ五つの選択技法による質問項目は、自由回答法による質問項目よりも回答率が高い。だからといって、単純に自由回答法よりも選択技法のほうが回答率が高いと結論付けることはできない。なぜなら、質問している内容が違うからだ。形式と内容を完全に分離できると考えるのは誤りだが、まったく違う事柄について問う質問をしているのだから、それは、形式の違いではなく、内容の違いを反映しているのかもしれない。厳密な比較を行うためには、自由回答法と選択技法の両方で同じ内容の質問をする必要があるだろう。したがって本稿での比較は厳密なものではなく、それゆえ、あくまで参考程度のものなのである。

質問項目別の無回答率

自由回答法 5 問、選択技法 5 問、合計 10 問の無回答率と、その差の検定(母集団に対応がある場合の T 検定)が何パーセント水準で有意かを示したのが、表 1 である。質問項目は、無回答率に関して昇順に並べ替えてある。無回答率が最も低いのは、生活水準に関する問で、以下、上位 5 つは、すべて選択技法によるものである。下位 5 つは、自由回答法

による問であり、質問の仕方による無回答率の差は大きい。これは検定結果にもあらわれている。網掛けの部分は、自由回答法と選択技法（による質問の無回答率）の差の検定が何パーセント水準で有意な結果となっているかを示している。斜線部分ではほとんど有意な差があるのに、斜線のついてない部分では、それほど有意な差は見られない。自由回答に関しては、「よいところ」が有意に他の自由回答よりも高い回答率（低い無回答率）を得ている。これは、答えやすい内容だからなのか、それとも質問票の最初の方にあるからなのかはよくわからない。

表1 各質問項目の無回答率とその差の検定の結果

	該当ケース数	無回答率	生活水準	性分業	住み続ける?	本人収入	階層帰属意識	よいところ	暮らし向き	よくないところ	豊かな生活
Q23 生活水準	285	0.7%									
Q21X1 性分業	285	1.4%	n.s.								
Q17X1 住み続ける?	285	3.5%	5%	5%							
Q24X1 本人収入	285	4.6%	1%	5%	n.s.						
Q19 階層帰属意識	285	4.9%	1%	5%	n.s.	n.s.					
Q3 よいところ	285	7.7%	1%	1%	5%	n.s.	n.s.				
Q18B 暮らし向き	285	11.6%	1%	1%	1%	1%	1%	5%			
Q14 よくないところ	285	11.9%	1%	1%	1%	1%	1%	5%	n.s.		
Q18A 豊かな生活	285	11.9%	1%	1%	1%	1%	1%	5%	n.s.	n.s.	
Q8X3 本人職	255	12.2%	1%	1%	1%	1%	1%	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

* 網掛けの部分は、自由回答法と選択技法（による質問の無回答率）の差の検定

回収法による無回答率の差

今回の調査では、調査票は留め置きと面接の2つの方法で回収された。回収法による無回答率の差を調べた結果が表2である。

表2 回収法による無回答率の差

	有効ケース数		無回答率		T検定の結果
	1 面接	2 留置	1 面接	2 留置	

Q3 よいところ	119	166	0.0%	13.3%	1%
Q8X3 本人職	105	150	1.9%	19.3%	1%
Q14 よくないところ	119	166	1.7%	19.3%	1%
Q18A 豊かな生活	119	166	0.8%	19.9%	1%
Q18B 暮し向き	119	166	1.7%	18.7%	1%
Q17X1 住み続ける?	119	166	0.8%	5.4%	5%
Q19 階層帰属意識	119	166	2.5%	6.6%	n.s.
Q21X1 性分業	119	166	0.0%	2.4%	n.s.
Q23 生活水準	119	166	0.8%	0.6%	n.s.
Q24X1 本人収入	119	166	5.9%	3.6%	n.s.

自由回答法の場合、回収法による差は歴然としている。やはり留め置きの場合、無回答が生じやすくなっている。自由回答でも面接している場合は、無回答率はすべて2パーセント以下であり、直接会ったはずねれば、かなり高い確率で何か答えてくれるということだ。これに対して、選択技法の場合、面接と留め置きの間ほとんど有意な差は見られない。

面接だけに限って自由回答法と選択技法の無回答率を比べると、それほど顕著な差は見られない。面接だけに限れば、一番無回答率が高いのは、本人収入（選択技法）、次が階層帰属意識（選択技法）である。自由回答の方が無回答率が高いというような一貫したパターンは、面接に関しては存在しない。

無回答の生起パターン

回答しない人は、どの質問項目に対しても一貫して回答をしない傾向が強いのだろうか？ それとも、何らかのパターンが存在するのだろうか？ この点を明らかにするために、上の10個の質問に対する回答/無回答を示す変数を使って因子分析を行った。主成分法を用い、固有値1以上の因子を抽出した上で、バリマックス回転を行った。結果は、表3のとおりである。分布が偏っているわりには、きれいな結果が出た。第1因子は、主に自由回答に対する因子負荷量が高く、第2因子は、主に選択技法に対する因子負荷量が高い。本人職と階層帰属意識は、どちらの因子との間にも若干の因子負荷量を持つため、完全な単純構造とはいえないが、第1因子を自由回答拒否因子、第2因子を選択肢拒否因子と名づけてよいだろう。

表3 回答/無回答を示す10変数を用いた因子分析(主成分法、バリマックス回転)

	回転後の因子負荷量		共通性
	第1因子	第2因子	
Q18B 暮し向き	0.88	0.00	0.78
Q18A 豊かな生活	0.83	0.10	0.71
Q14 よくないところ	0.78	0.08	0.62
Q3 よいところ	0.78	0.08	0.62
Q8X3 本人職	0.43	0.34	0.30
Q19 階層帰属意識	0.33	0.29	0.19
Q23 生活水準	0.14	0.77	0.61
Q24X1 本人収入	0.03	0.68	0.47
Q17X1 住み続ける?	0.01	0.54	0.30
Q21X1 性分業	0.11	0.54	0.31
初期の固有値	3.31	1.58	
回転後の説明率(%)	30.25	18.68	48.93(合計)

* 因子負荷量が0.3以上の欄は網掛けを施した。

回答者の属性の効果

回答者のさまざまな社会的属性が、質問に対する回答/無回答に影響を及ぼすことがあるのだろうか。このことを調べるために、本人の性別、年齢、教育年数、原村生まれかどうか、会参加数といった回答者の属性と、10個の質問に対する回答・無回答を示す変数とのあいだの相関係数を調べた。その結果が表4である。

ただし、ある選択技法の質問に対して無回答である人は、他の選択技法の質問に対しても無回答である傾向があることが前の節の因子分析でも明らかになっている。属性を示す変数は、すべて選択技法の質問から作られているので、属性と選択技法に対する回答/無回答との相関係数を調べてもあまり意味が無いかもしれない。

顕著な傾向は、原村生まれの人は、自由回答に答えない傾向があるということである。本人職を除けば、自由回答は原村ないしは原村での生活を聞いているため、「地元」の人にとってはかえって答えにくい質問だったのかもしれない。

表4 属性と回答/無回答との相関係数

	性別	年齢	教育年数	原村生まれ	会参加数
Q3 よいところ	-0.10	0.02	0.02	0.18**	-0.05
Q8X3 本人職	-0.04	0.13*	-0.20**	0.32**	0.02
Q14 よくないところ	-0.02	0.09	-0.12*	0.20**	-0.02
Q18A 豊かな生活	-0.10	0.05	-0.09	0.18**	-0.01
Q18B 暮し向き	-0.11	0.09	-0.10	0.19**	-0.01
Q17X1 住み続ける?	0.00	-0.06	0.05	-0.03	-0.02
Q19 階層帰属意識	0.04	0.05	-0.11	0.02	0.03
Q21X1 性分業	0.00	0.06	-0.15*	0.09	0.22**
Q23 生活水準	0.00	-0.04	-0.02	0.02	-0.05
Q24X1 本人収入	-0.05	-0.07	0.01	-0.03	0.01

3. 自由回答の長さ

次に自由回答の長さについて分析してみよう。もちろん長い回答ほど、妥当性が高いとは言えない。たったの一語で適切にすべてを語るができる場合があるかもしれないし、原稿用紙を数十枚費やさなければうまく表現できないような事柄があるかもしれない。逆に本来なら長文を必要とするような事柄なのに、少ししか回答しない人もいるかもしれないし、その一方で、一語ですむはずなのに長々と冗長な回答をする人もいるかもしれない。しかし、一般にどういう人が長い回答をするのか、それは調査法と関係があるのか、といった問題は、データ収集をする上で知っておくべき基礎的な知識であるように思われる。

自由回答の長さの記述統計量は、表5のとおりである。職業に関しては、コンピュータコーディングの対象とできていなかったため、現在、その長さのデータが無い。そこで、その他の4つの質問項目について計算した。「よくないところ」に関しては、突出して長く書く人が数名いるために平均値を引き上げているようだ。長さの平均値にこのような違いが出るのは、「答えやすさ」の違いのせいなのか、それとも回答者が自分の考えを述べるために「必要な文字数」が質問によって違うせいなのかは、わからない。

表5 自由回答の長さ

	有効ケース数	最小値	25パーセント	中央値	75パーセント	最大値	平均値	標準偏差
Q18B 暮し向き	252	2	6	13	23.75	107	18.5	17.7
Q3 よいところ	263	2	9	16	28	135	21.8	18.9
Q14 よくないところ	251	3	7	15	30	168	23.2	25.3
Q18A 豊かな生活	251	3	12	19	31	118	24.8	18.7

回収法による自由回答の長さの違い

回収法によって回答の長さの違いが出るのだろうか。その結果を示したのが、表7である。全般に、留置きのほうが長い回答を得られる。面接の2倍前後の平均値が得られてい

る。留め置きの場合、一部に長い回答をする人が入るために、平均値を引き上げているということではなく、全般的に長い回答が得られる傾向がある。これは、調査員が「要約」して書いてしまっているのかもしれない。上の4つの自由回答の場合には必ず、

【回答通り記入するが、長すぎる場合は、「簡単に言うとどういうことでしょうか」と重ねてたずねる】

という表記が調査票に書いてあるし、そうするよう調査員にもあらかじめ指示してあったのだが、実際には「要約」が生じているのかもしれない。

いずれにせよ、長文の回答が必要な場合、それから本人の言葉づかいそのものに関心がある場合、回収法は留め置き法のほうが適切であるということだ。

表6 回収法による自由回答の長さの違い（面接と留め置きの平均値はすべて1パーセント水準で有意差あり）

	回収法	有効ケース数	最小値	25パーセントタイル	中央値	75パーセントタイル	最大値	平均値	標準偏差
Q3 よいところ	1 面接	119	2	6	11	19	40	13.6	8.7
	2 留置	144	5	13	23	38.5	135	28.5	22.1
Q14 よくないところ	1 面接	117	3	5	10	20	59	13.9	11.4
	2 留置	134	3	9.75	20.5	43.25	168	31.3	30.8
Q18A 豊かな生活	1 面接	118	3	10	16	21.25	51	16.9	9.2
	2 留置	133	5	16	26	41	118	31.7	22.1
Q18B 暮し向き	1 面接	117	2	5	9	16.5	92	12.4	11.5
	2 留置	135	2	8	17	36	107	23.8	20.4

回答の長さの相互関係

次に、回答の長さ同士の相関係数を調べてみよう。表7はその結果を示している。全般に0.5前後の相関係数が得られる。ある質問項目で相対的に長い回答を書く人は、他の質問項目でも長い回答を書く傾向があるようだ。

表7 回答の長さの間の相関係数（数値は1パーセント水準ですべて有意）

	よいところ	よくないところ	豊かな生活
Q14 よくないところ	0.56		
Q18A 豊かな生活	0.57	0.52	
Q18B 暮し向き	0.50	0.50	0.49

回答の長さとは回答者の社会的属性

回答者の属性が回答の長さにも及ぼす影響を見ておこう。回答者の社会的属性と回答の長さの相関係数を示したのが、表 8 である。女性の方が全般に長い回答を書く傾向が見られる。教育年数が長いと、「よくないところ」と「豊かな生活」に関して長い回答を書く傾向が見られる。また、原村生まれの人は、「よくないところ」に関しては、あまり長く書かない傾向が見られる。

表 8 回答の長さとは回答者の属性の相関係数

	よいところ	よくないところ	豊かな生活	暮らし向き
本人性別（1男、2女）	0.16 [*]	0.13 [*]	0.15 [*]	0.12
年齢	0.02	0.02	-0.03	0.11
本人教育年数	0.09	0.17 ^{**}	0.16 [*]	0.12
原村生まれ	-0.08	-0.16 ^{**}	-0.07	-0.11
会参加数	-0.02	0.01	-0.02	0.06

^{*} 5パーセント水準で有意

^{**} 1パーセント水準で有意

まとめ

- 1 自由回答は選択肢の回答よりも回答率が低い。
- 2 留め置きで回収するよりも面接で回収する方が、自由回答の回答率は高くなる傾向にある。選択肢の回答に関しては明確な差は見られない。
- 3 特定の自由回答に回答する人は、他の自由回答に関しても回答する傾向が強い。また、ある質問に対して長い回答を書く人は、他の質問に対してもやはり長く回答する傾向がある。
- 4 原村生まれの人は、その他の人に比べて、自由回答に答えない傾向がある。また答えても、比較的短い回答をする傾向がある。
- 5 女性の方が長い回答をする傾向がある。
- 6 面接法で調査票を回収するよりも留め置き法で回収する方が長い回答を得られやすい。

上の 2 と 6 から言えることは、高い回答率と長い回答はトレードオフの関係にあるということだ。とにかく高い回答率を得たいという場合は、面接してデータを収集すべきだし、逆にある程度以上の長さの回答を得たければ、調査票を留め置きして後日回収すべきだということだ。

回答者の社会的属性の効果に関しては、それほど明確な傾向が見られない。発見された傾向もそれほど得心のいくものではない。今後更なる分析が必要であろう。

注

[1] 調査票は、附属のCDの中の

¥附属資料¥第2部第1章¥原村調査票.jtd
である。これは、一太郎9のファイルである。